

外来種を駆除 自然林再生へ

在来種調べ効果検証

鹿児島市 城山公園



竹が伐採され草木が生い茂るようになった斜面
＝鹿児島市城山町の城山公園

一部が国の文化財になっている鹿児島市城山町の城山公園。同市が、モウソウチクなどの外来種駆除に本腰を入れたことで、かつての自然林の姿がよみがえりつつある。同市公園緑化課は在来種調査を続けながら、駆除の効果を検証している。

城山公園の遊歩道を上り中腹付近の道をそぐれて、藪の中を進むと、急斜面に青々とした膝丈ほどの草木が茂っている。同課の西原直樹主幹によると、以前は20センチ近いモウソウチクがあり、日中でも薄暗かったが、伐採して日当たりが良くなったという。西原主幹は「在来種の生育が阻まれる前に対策を打つことが大切だと力を込める。約16種ある同公園はもともと約350種が生い茂る照葉樹林。原生的な森林に近い姿が

残されていることなどが評価され、1931(昭和6)年に、このうちの約11種が国の文化財に指定された。2012年度調査では、ヤマコンニャクなど、

かつて存在していた希少種の一部が確認されなかったため、影響が考えられる外来種駆除の機運が高まった。市は文化庁と協議して、15年度から外来種の駆除を本格実施。モウソウチク1300平方メートル、トウチク200平方メートルのほか、4カ所で群生するハヤトウリを駆除した。

伐採した竹は再び生えるが、毎年切り続けることで樹勢を弱めることができ、19年度までに根絶できる見通いだ。雨水排水溝も整備し、斜面に生える植物が流出しないよう対策を進める。これら城山公園の在来種保護の費用は15、17年度で計約9400万円に上る。



ただ、課題は正確な植生の調査。これまで調査する季節が統一されておらず、在来種や外来種の増減が十分把握できていなかった。中馬礼士郎課長は「調査方法を確立し、駆除効果の検証につなげる。城山公園は市民の心よりどころ。観光客も増えているので、よりよい環境づくりに努めたい」と話した。
(高味潤也)